

# マイ・タイムライン実践ポイントブック検討会（第2回）

## ○開催の目的

マイ・タイムラインの作成・普及を促進させるための支援策として、全国の自治体等でのこれまでの取組を踏まえながら、避難の実効性を高める取組の要点や継続的な実施方法の手がかりなどを取りまとめた「実践ポイントブック」を作成することを目的に、「マイ・タイムライン実践ポイントブック検討会」を設置した。

### 【日時】

令和2年5月20日(水) 13:00～15:00

### 【場所】

Web会議開催

### 【議事】

マイ・タイムライン実践ポイントブック(案)について

- ・主なご意見と対応について
- ・マイ・タイムライン実践ポイントブックの構成について

### 【委員】

(◎:委員長、敬称略)

- ◎ 関 克己 公益財団法人河川財団 理事長  
佐藤 翔輔 東北大学 災害科学国際研究所 准教授  
鈴江 奈々 日本テレビ放送網 アナウンサー  
関谷 直也 東京大学 大学院情報学環 准教授  
知花 武佳 東京大学 大学院工学系研究科 准教授  
山神 明理 NPO法人気象キャスターネットワーク気象予報士  
山崎 晴太郎 (株)セイトロウデザイン代表  
河井 英隆 東京都大田区総務部防災支援担当課長

### <オブザーバー>

内閣府防災担当

総務省消防庁防災国民保護・防災部

## ●議事概要

第2回は、事務局からマイ・タイムライン実践ポイントブックの素案について説明し、各委員から意見を聞いた。

### ○前回の検討会での議論と指摘事項について

- ・住民がハザードマップを用いて、自身の水害リスクを理解するとともに、水害の発生が切迫した状況下の対応をイメージして、避難行動の基本を習得することを当面の目標とする。
- ・マイ・タイムラインの取り組みを【ステージ1】・【ステージ2】・【ステージ3】の段階的に整理し、当面は、【ステージ1】を主眼に広めていく。
- ・地域特有の洪水リスクを「知る」ことから始め、そこから「気づく」ことや自分自身に置き換えて、どういうタイミングで避難することが良いのか、どのような避難行動が必要かを住民自ら「考える」ことができるように取り組む。その一つの検討手法として、検討対象者相互の「気づき」が期待できるワークショップ形式でのマイ・タイムラインの検討は有効である。

### ○マイ・タイムライン実践ポイントブックについて

- ・マイ・タイムライン実践ポイントブックは、市区町村の水防災に従事する職員から報道関係者等に対して幅広く参考となる視点で以下の3つを公表する。
  - (1)「マイ・タイムラインガイド【Ver1】」:水防災に従事する職員等がマイ・タイムラインについて詳しく学ぶためのもの
  - (2)「マイ・タイムライン検討のためのワークショップの進め方(ワークショップ虎の巻)」:市区町村の水防災に従事する職員等が主体となり、マイ・タイムラインワークショップを実施できるよう、事例を参考に、手順、事前準備、参考となる資料等を取りまとめたもの
  - (3)「マイ・タイムラインかんたん検討ガイド～普及のための手引き～」:マイ・タイムラインを広める人(市区町村職員、都道府県職員、国職員、学校教員、報道関係者、マイ・タイムラインリーダー等)が「マイ・タイムラインってこんなもの」と教える(周知する)時に使用するもの
- ・マイ・タイムラインとはなにか分かっていたことが大事であるため、マイ・タイムラインの本質である自分自身で「考える」箇所は更に強調する。【関谷委員】
- ・ワークショップの時間内における達成目標と使用するツール等を確認できるようにする。【佐藤委員】
- ・河川の規模や気象条件により、警戒レベルが順に来るとは限らないことをしっかり明示する。【関谷委員】

### ○今後の展開を踏まえた意見

- ・過去の水害に関して、何パターンか模範解答のようなタイムラインを用意してあるとよい。【知花委員】
- ・新型コロナの観点からオンラインでできるワークショップを検討すべきである。【鈴江委員】
- ・講習会で一緒に考えて気づくことも大切だが、住所や家庭環境によって、ひな形が作成できるアプリがあってもよい。地域の方たちで共創できるものがあるとよい。【山崎委員】
- ・個人のリスク情報がしっかり理解できるハザードマップに改訂していく必要がある。【関委員長】
- ・さらに洪水災害に関心を持ってもらうため、広報戦略等の展開を行うことが必要である。
- ・マイ・タイムラインリーダーの育成は、eラーニングなどオンラインでできると思われる。リーダーから各地域へという段階では、一方向のコミュニケーションとならないよう、配慮してやっていく必要がある。【山神委員】
- ・危険な地域に住んでいる方々に、いかに講習会等に参加いただくかというのが今後の課題と考えている。【河井委員】